

令和八年度西条市交通安全市民大会

交通安全子供作文優秀作品

西条市交通安全推進協議会

目次

○中川小学校	三年	黒坂 梨乃	大切なこと	3
○田野小学校	三年	鈴江 光	みんなのための交通安全	5
○三芳小学校	五年	近藤 朝日	いろいろな場所にひそむきけん	7
○西条小学校	五年	宮本 朔衣	小さな習慣が命を守る	9
○国安小学校	六年	野田 采葉	自分の立場が変わるとき	11
○橘小学校	六年	川上 陽大	カーブミラーの大切さ	13
○東予東中学校	一年	諏訪 優人	命と安全を守り合う視点	15
○西条東中学校	一年	高橋 友里愛	弟の事故が私に教えてくれたこと	17
○西条西中学校	一年	森 俊輔	大切な相棒	20
○西条北中学校	二年	赤井 晃良	家族の安全と交通ルール	22

大切なこと

中川小学校 三年 黒坂 梨乃

三年生になって、ぼくの楽しみが一つふえました。それは、自転車で友だちの家へ遊びに行けるようになったことです。

はじめて友だちの家まで自転車で行った時は、不安な気持ちもありました。なぜなら、ぼくの家近くには国道十一号線という大きな道路が通っているからです。その道をわたって毎日学校に行っていますが、大きな車が通ったり、スピードの速い車が通ったりするので、不安な時や心ばいな時があります。ぼくは「きけんな目にあったらどうしよう。」と思いましたが、自転車にのる時に、いつも家の人から言われている気をつけることや、学校で教えてもらったことを思い出しながらのるようにしました。

ぼくが気をつけたことは、ヘルメットを正しくかぶる。車が前後から来ていないかちゅう意する。車が来たら道のはしによけて止まる。国道十一号線は、

一人ではなく、かならず家のだれかと行く。一れつになって行く。道がカーブになっている所は、スピードを落としながらミラーをよく見て、車が来ていないかをかくにんしてから進む。地いきの人に会った時は、あいさつをする。などです。

友だちの家に行く途中で、車が何台か後ろから来たけれど、うまくはしによけて止まることができました。また、中川で自転車にのっていると、たくさんのにせんにかこまれているし、自分の前の方から次から次へとさわやかな風がふいて来るので、とてもそうかいでした。そして、ぶじに家に帰ることができた時、晴れ晴れとした気分でした。

自転車にのる時は、学校で学んだ交通ルールや、家の人から教えてもらった、たくさんのことを思い出して気をつけなければならないので、とても大へんです。でも、せっかく友だちの家に楽しく遊びに行くのに、と中でけがをしたらつらいし、ぶじに帰れなくなると悲しい気持ちになるので、ゆだんしないように気をつけて、しんちように行動することが大切だと思います。

たくさんの方が利用する町の道路には、歩いて
いる人、自転車にのっている人、車やバイク、バスを
運転している人などがいます。また、子どもや高れ
い者、まだ交通ルールを学んでいない小さな子ども
など、いろいろな人が毎日道路を使っています。み
んながけがやじこにあうことなく、安心して学校や
友だちの家、仕事、買い物、旅行などに行き、ぶじ
に家に帰るためには、一人一人がいつも交通ルール
を守ることが大切だと思います。

ぼくは、自転車に楽しくのれるようになって、こ
のことに気づくことができました。これから自分
のいのちや、みんなの大切ないのちをまもるために、
交通安全に気をつけていきたいです。そして、じこ
のない中川を目指してがんばりたいです。

みんなのための交通安全

田野小学校 三年 鈴江 光

私は、朝早く起きることができたときは、お父さんと運動をします。とくに、風が気持ちよいので、お父さんと家の外を走るのが好きです。でも、安全に走ることができなければ、楽しく走れなくなってしまいます。それは悲しいです。

歩く人も自転車に乗る人も、自動車を運転する人も、みんなが相手のことを考えて、交通安全に気をつけることができれば、家の外の道路でもみんなが楽しくすごせるのではないかと思います。また、自分が使う自転車やヘルメットは、自分でせきにんを持って点検んして、安全に使うことが、大切だと思います。私が、このように考えるようになったきっかけを、二つ書きたいと思います。それは、「登下校のとき」と「友だちと自転車に乗って遊んだとき」のことです。

登下校では、学校までの道を友だちと歩きます。

私たちが歩く道路は、自動車と人が同時に通るには、とてもせまいです。そのため、私たちは、横に広がることなく、一列にならんで歩いています。ところが、そのせまい道路を、何台もの車がスピードを出して通って行きます。風の強い日や雨の強い日も、車は、よく通ります。私たちのそばを車が走るので、とてもこわいなと思っています。白線の内側（路そくたい）を歩くだけではなく、ときには、止まりながら、歩くように気をつけています。それでも、車がぶつかってきたら大けがををすると思うので、運転手の人には、私たちの目線に立って、スピードをおそくしてほしいと思います。

私は、友だちと遊ぶときには、自転車を使います。い前に、自転車に乗って、友だちと遊んでいたときに、自転車ごと転んでしまったことがあります。その時に、うでを大きくすりむいたり、おでこも少しすりむいたりしました。ヘルメットがあったおかげで、頭を強く打つことはありませんでした。ヘルメットをつけていましたが、自分の首回りのサイズに合わせていなかったことに気づきました。運が悪け

れば、頭を強く打っていたかもしれないと、おそろしくなりました。それから、きちんとヘルメットや自転車の点検をすることが大切だと実感しました。今では、ヘルメットのサイズが、今の自分に合うように点検や調整をしています。

以上二つのことから、私は、①歩行者、自転車や自動車を運転する人が、たがいに相手のことを考えながら、交通安全に気をつける。②自分が使う自転車やヘルメットは、自分でせきにんを持って点検して、安全に使う。といったことが大切だと強く思うようになりました。

私は、これからも、交通安全に気をつけたいと思います。そして、ときどきしている父との朝のジョギングを、交通安全にも気をつけて、楽しみたいと思います。

いろいろな場所にひそむきけん

三芳小学校 五年 近藤 朝日

ぼくは、目の前で交通事故を三回ほど見たことがあります。そこで、交通安全に気を付けようと思ったので、この作文を書きたいと思いました。

ぼくは、自転車に乗っているとき、車がもうスピードでやってきてひかれそうになったことが何回かあります。それは、道をわたるときに自分が止まらなかったのが悪かったと思っています。

ぼくの住む地域の道やいろいろな場所には、たくさんのおきけんがひそんでいると思います。三芳校区にも、横断歩道のない道や信号機のない大きな交差点があります。これは特にあぶないと思います。理由は、車も歩く人も、信号機がないといつわたればいいか分からないからです。もし、いっしょのタイミングで行ってしまったら事故につながります。そこで、信号機がある所を通るか、歩行者優先の横断歩道のある道を通ろうと思いました。

次も、自分が体験したことです。ぼくは夜にかいをたのまれて、自転車でスーパーマーケットに行きました。スーパーマーケットに着く少し前には、信号機がある横断歩道があります。信号機が青になったのでぼくが行こうとすると、急に横からすごいスピードで車が通りすぎ去っていきました。その時自分が悪かったことは、信号機が青になったからといって、左右の確認を忘れていたことです。さらに、夜なのにライトを付けることも忘れていました。これが主な原因です。そこでぼくは、どのようにいかいせんすればよいのかを考えました。次からは、午後五時をすぎたからおつかいなどで外に行くときは、ライトは忘れずに必ず付けること。信号機が青でも左右を確実に四回以上は確認することを習慣にすること。この二つを絶対守り、きけんをへらしたいなと思いました。

ぼくは前に学校で調べ学習をして、愛媛県での交通事故りつが全国でも高いことを知ってびっくりしました。これからは、きけんな事故が起きないように自分で「これを気を付ける！」と目標を立てて、

自分自身が事故にあわないようにしたいです。また、この場所にはどのような事故が多いのかを調べて知ったり、知ったことを友達や家族の人たちに教えたりしたいです。こうして、自分も友達も家族も、大切な人たちが事故にあわず、安全に幸せにくらせるようにしていきたいです。

小さな習慣が命を守る

西条小学校 五年 宮本 朔衣

交通ルールを守るとは、大人にとって当たり前のことです。信号が赤なら止まる、道路をわたるときは左右をよく見る、自転車に乗るときは安全に走る。どれも、自分の命を守るために必要なことです。でも、交通ルールを守ることが大切なのは、大人だけではなく、子ども、小さいころから交通ルールを守る習慣を身につけることが大切だと思います。

私は、交通事故をへらすためには、「気をつけよう」と思うだけではなく、毎日の生活の中で交通ルールを守ることが大切だと思います。

たとえば、急いでるときに「車が来ていないから大丈夫」と思って、赤信号を渡ってしまったら、どうでしょう。たまたま事故にならなかったとしても、それをくり返していると、「これくらいなら大丈夫」という気持ちになってしまいかもしれません。でも、

交通事故は、いつ起こるか分かりません。

わたしも、横断歩道をわたるときには、信号が青になってもすぐにわたらず、左右を確にんするようにしています。青信号だから絶対に安全とは限らないからです。車を運転している人が、こちらに気づいていないこともあるかもしれません。だからこそ、自分の目で安全を確かめることが大切です。

そして、子どもの頃に身につけた習慣は大人になっても続いていくと思います。小さい頃から、「赤信号では止まる」「道路ではふざけない」「横断歩道をわたる」「左右を確にんする」ということを何度もくり返していれば、それが自然と身についていきます。

今は、家族や学校の先生が交通ルールを教えてくださいています。でも、いつか自分が大人になったときには、自分で自分の命を守らなければなりません。そして、わたしたちが大人になったとき、今度は子どもたちに交通ルールを教える立場になるかもしれません。

だから子どもの頃から交通ルールを守ることには、

大きな意味があると思います。今の自分の命を守るだけではなく、これから先、自分や家族、そして周りの人の命を守ることにともつながるからです。

もちろん、子どもだけが気をつければよいわけではありません。大人が交通ルールを守るすがたを見て、子どもも「ルールを守るとは当たり前なんだ」と学んでいくと思います。今日、わたしが守った一つのルールが、誰かの命を守るかもしれません。小さい頃から交通ルールを守る習慣を身につければ、それは大人になっても続いて行くと思います。

大人が守る。子どもも守る。そして、みんなで守る。一人の「守る」は小さくても、それが集まれば事故をへらす大きな力になります。わたしはこれから、交通ルールを守ることを当たり前にし、命を守る習慣を一つずつ積み重ねていきたいです。

自分の立場が変わるとき

国安小学校 六年 野田 采葉

みなさんは、青切符というものを知っていますか。青切符とは、十六歳以上の人が、信号無視や、かきさし運転他、並んで走行するなどを行ったときに交付されます。そして、交通反則通告制度に基づき、該当する交通違反に関しては、反則金を納めることで、刑事処分をまぬがれます。一方で、赤切符は飲酒運転やスマホなどを使用中の危険運転を行ったとき、重大な事故につながったときに、交付されます。今では、この青切符を使ったサギが横行しています。具体的にいえば、警察官のフリをした人が走行中の自転車をとめて、「今すぐ現金をはらわないと、たいほする」と不安をあおり現金をだましとるサギです。実際は、その場で現金を要求されることはなく、警察官が青切符を交付し、支払いは、銀行やコンビニ等で行います。そのため、うその情報にだまされず、冷静な判断をとり、正しい情報を得るこ

とが大切です。もし私がこの場面に出会ったら、きつと頭がパニックになって現金をはらってしまうと思います。だから、この事例を頭において、だまされないように気をつけたいと思います。

私は、友達と遊ぶとき、自転車に乗って移動します。そのとき友達と並んで走行することがよくあります。しかし、この行動は青切符の対象となる行動だと分かりました。そして、友達と移動しているときだけでなく、一人で、曲がり角を曲がるとき、ブレーキをかけるだけで、完全に止まって、左右の確認をしていません。私が、自転車に乗っているときのことをふりかえると、ケガをしたり、相手にまでケガをさせたりしてしまう可能性があったことに気が付きました。

実際に、自転車同士でぶつかりそうになったことがあります。見通しの良い交差点で相手が横切るように走ってきて、私はまっすぐ通ろうとしたときのことでした。私は相手の人とうまく交わらずに、よけながら通れると思いブレーキをあまくかけました。しかし予想とはちがひ、相手もブレーキをあま

くかけていて、おたがいが自分の前を通り過ぎるだろうと思った結果、ぶつかりそうになりました。見えている人でも大丈夫だろうと安心せず、こうなるかもしれないと常に予測しておくことが大事だと分かりました。これからは、自分の自転車の乗り方や、一緒にいる友達との乗り方に気をつけ、「かもしれない運転」に心がけようと思いました。

私たちの学校では、毎年、交通安全教室が行われています。そこで、警察の方がお話ししてくださいました。初めて知った合言葉がありました。それは、「ブタはしゃべる」です。その意味は、ブレーキが効くか、タイヤの空気が入っているか、ハンドルのにぎってガタガタしないか、反射材がついているか車体や部品がぐらぐらしていないか、ベルは鳴るかの五つです。私は今まで、点検する場所としてブレーキと、タイヤの空気くらいしか気にしていませんでしたが、この合言葉を聞いて、覚えやすくて、ここも点検するのかと思いました。安全に乗るためには、日ごろから、自転車の状態に目をむけ、交通ルールを守ることが大切だと分かりました。

そして、歩行者と運転手がゆずり合いの気持ちを持って、安全に過ごすためには、自分の意思を相手に伝えることが大事だと思っています。それは、歩行者が、信号のない横断歩道をわたるとき、手を上げて車に、「止まってください」と横断意思を伝えることによって、わたるかわたらないかが、はっきりして事故につながりにくくなります。止まってもらったときには、あたりまえと思わず、笑顔で「ありがとう」のえしゃくをわすれずに、おたがい気持ちの良い場面になるように、取り組みたいと思います。

これから、中学生になると、毎日自転車で通学します。今まで通ったことのない道や、車通りの多い大きな道などを走るの、よく周りを見て、安全に通学したいです。そして、小学生という立場から、中学生という立場に変わるので、責任を持って、自転車に乗っていききたいです。

カーブミラーの大切さ

橘小学校 六年 川上 陽大

最近、ぼくは野々市の曲がり角にカーブミラーがないことに気付きました。その場所を自転車で曲がろうとすると、車がすごい速さで通って、事故になりそうでした。そのとき「あぶなかった。スピードを出さなくてよかった。」と思いました。そこは、下り坂でもあり、ふつうの道よりもスピードが出たので、よりこわかったです。

この経験を通して、ぼくはカーブミラーがあってもなくても、右・左・右を見て、人や車が来ていなかを確認してから道をわたったり、曲がったりすればいいと思いました。また、車の運転手が気を付けることも大切だと思いました。その理由は、カーブミラーがあつたとしても、車の運転手がカーブミラーを見ていなかったら、意味がないと思ったからです。そして、運転手が「急に人が飛び出してきた。」などと主張し、言い争いになるかもしれない

ん。

そこでぼくは、カーブミラーの設置について調べることにしました。

カーブミラーは、家庭用・ガレージ用の小型サイズでも約一万円から二万円もの値段がします。道路用の大型サイズや二面鏡タイプでは、約三万円から十五万円もするので、個人で道路につけるのは難しいと思いました。また、公道へのカーブミラーの設置は、住んでいる自治体（市役所の道路課など）へ自治会や町内会を通じて設置をお願いすることができですが、必ず設置してくれるわけではないそうです。

さらに、ぼくはカーブミラーのよい働きについて調べることにしました。すると、カーブミラーの重要な働きが三つ分かりました。

一つ目は、死角をなくせることです。直接目視できない曲がり角や路地の先から来る車・自転車・歩行者を映し出すことができます。

二つ目は、事故防止・見落とし不良による出会いがしらのしゅうとつやまきこみ事故を未然に防ぐこ

とができることです。

三つめは、安全の補助・物理的な道路改良が難しい場所で、比かく的簡単に視界の確保ができることです。

このようにカーブミラーについて調べていくと、カーブミラーがなかったことを事故にあいそうだった理由にしていたことに気付きました。しかし、ぼくもスピードを出しすぎていたのかもしれないと思うようになりました。

ぼくは今、野々市の曲がり角を通るときは、一度止まって右・左・右を見てから、道路のはしを通っています。だから、今は全然こわくありません。あぶない場面にそうぐうしないように、カーブミラーがあってもなくても、曲がり角や来ている人や車が見えにくい場合は、一度自転車を止めて、右・左・右を必ず見ようと思います。そして、交通ルールを自分から守っていこうとする人になりたいです。

命と安全を守り合う視点

東予東中学校 一年 諏訪 優人

僕の出身小学校には、毎朝通学路の見守りをしてくださっている安全ボランティアの方々がいます。登校中にお会いすると、懐かしさと感謝が込み上げ、自然と笑顔で挨拶をすることができます。ある日、その方が通学路の草刈りをしてくださっていたという話を聞いた。「背の高い草があると、小さい子はそれを避けようとして車道にはみ出してしまいかもしれないから」という理由だったそう。その道を運転するドライバーからは、なかなか気付けないと思う。ボランティアの方は、小さな子どもの視点に立っているからこそ、隠れた危険に気付けたのだろう。命と安全を守るための、思いやりの視点だ。このように、誰かの安全を思いやる視点の大切さは、僕自身が車に乗っているときにも、改めて実感させられる。

「こういう所、集団でふくらんで出てきたら危な

いけん。」

「こことか、自転車出てきても見えんから、スピード落とさんとね。」

「黒い服は夜には見えにくいね。」

などと、運転している母が言う。助手席の僕も、言われてみれば、確かに危ない場所が多いことに気付かされる。歩行者や自転車は、車の視点からは思ってた以上に見落とされやすい存在であると感じた。また、ルールを守ったうえで取る行動も、ドライバーには想定しにくい場面があることにも気付いた。歩行者も車も、お互いの安全のために「相手がどう動くか」まで想像することが大切だ。今、自分の視点に映っているものだけに気を付けるのではなく、相手の視点を想像する。交通ルールを守ることとはもちろんだが、「こんな風に行動するかもしれない」と皆が相手を思いやれば、互いの命と安全を守り合うことができるはずだ。そして、そのように相手の視点を想像する心の余裕を持つためには、時間にゆとりを持って移動することも大切だろう。

最後に、それぞれの視点から気が付いたことを共

有していくことを大切にしたい。安全ボランティアの方の視点を借りて、危険箇所を意識する。ドライバーである家族から、僕たち歩行者や自転車が注意すべき場所や行動を教えてください。僕からも、横断歩道の白線が消えかかっていて車が止まりにくい場所や、学校で教わった危険箇所については、家族に伝えるようにしている。祖母のような高齢者は、横断歩道を渡るのに時間がかかることについてもみんなに知ってほしい。そうやって多くの視点から危険を想像し、自分とみんなの命、そして安全を守る存在になりたい。

弟の事故が私に教えてくれたこと

西条東中学校 一年 高橋 友里愛

去年の夏、いつものように弟二人と一緒に遊んでいました。すると弟が急に道路に飛び出しました。

そのとき、ちょうど車が来て、ぶつかってしまいました。その道はいつもスピードを出す車がたくさん通ります。みんなでいつも気を付けていたはずなのに、一瞬で目の前が真っ暗になりました。弟は、泣きながらお父さんの元へ行き、救急車で運ばれました。幸い意識がありましたが、顔やおなかには、傷がたくさんありました。私が急いでお母さんに電話をしました。そのときのお母さんの声が震えていたのを今でも覚えています。運転手さんは、急いでブレーキをかけていましたが、事故を防ぐことはできませんでした。そのときの運転手さんの真っ青な顔も鮮明に覚えています。

いつも、テレビで交通事故のニュースを見てどうして事故が起こってしまうのだろうと思っていまし

た。この事故をきっかけに、少しだけなら大丈夫、自分は大丈夫と思い込んでいる人が多いからだと思付きました。一回の事故で、目の前が真っ暗になった私、泣き止まない弟、慌てているお母さん、真っ青な顔の運転手さん、数えきれないほどの人が悲しい気持ちになります。もしあのとき私が、

「ちゃんと右左を見てね。」

と言っていたら。弟が道を渡る前に右左を見ていたら。運転手さんがもう少しスピードを落としていたら。一人一人が気を付けていたら今回の事故はなかったかもしれません。

交通事故を無くすためには、一人一人のちょっとした意識が大切だと思います。車を運転する人は、運転に集中する、スピードを出しすぎない、交通ルールを守る。自転車の人はヘルメットを着ける、夜はライトをつける、決められたところを走る。歩く人は、信号があってもなくても左右を確認する、歩行者専用道路を歩くといった当たり前のことを全員が気を付けると事故は減っていくと思います。しかし、私だけが気を付けても事故は起こってしまいま

す。まずは、地域の人や家族、友達にこのことを伝えていきます。

最近、運転中のながらスマホは重大な死傷事故の原因となっているそうです。スマホを使っているときの死亡事故率は、使っていないときの約四倍高く、わずか二秒のわき見運転でも約三十三メートル進む非常に危険な行為だということを知りました。私も、自転車に乗っているときにスマホを触ると、ながら運転になってしまいます。そうならないように気を付ける必要があります。

調べてみると、三重県の新名神高速道路で三月、大型トラックの運転手がながらスマホをして、計六人が死亡した事故がありました。亡くなった方の遺体は、傷がたくさんあったようで、その被害者の奥さんが泣いている姿がとても印象的でした。このニュースで悲しんでいる人の多さに胸が痛くなりました。

ながら運転を防ぐためには、運転中や歩行中に携帯電話やスマートフォンを操作せず、立ち止まって安全な場所で使用することが大切です。自分自身が

けがをするだけではなく、まわりの人にけがをさせてしまうこともあるので、一人一人が気を付けることが大切です。私も自転車に乗っているときに、携帯電話やスマートフォンを使うときは安全な場所で降りて使うようにします。

今後、このようなことをなくすために、家族で話し合いました。私は、

「信号があってもなくても確認する。」

と言いました。信号があってもなくても確認をすることで、車にぶつかったり、ひかれたりすることがなくなるからです。弟は、

「自転車に乗るときは絶対にヘルメットをかぶる。」

と言っていました。弟はよく自転車に乗るので気を付けてほしいです。お父さんは、

「あの道はゆっくり走らないけんね。」

と言いました。家の前の道などで毎日意識してほしいです。お母さんは、

「ながら運転は絶対だめだね。」

と言いました。私も一緒に車に乗っているときは声をかけるようにしたいです。家族で、話し合いをし

て、全員が安全な生活ができるように一人一人が気を付けないといけないことが分かりました。弟の事故が家族みんなに命の大切さ、交通安全の大切さを教えてくれました。この夏も、安心・安全に楽しく過ごせるようにしたいです。

大切な相棒

西条西中学校 一年 森 俊輔

小学校五年生の時のよく晴れた日の午後のことだ。学校から帰った僕は近所の店にお菓子を買いに出かけることにした。

今、四時半。門限は五時だ。「早くいかなきゃ。」と急いでいた僕は、玄関に置いてあるヘルメットを被るのが面倒に感じた。そのまま外に出ようとしたその時、「ちよつと待って、ヘルメットはちゃんと被りなさい。近いからと言って油断したらだめ。」と母の強い声が響いた。

正直なところ、ムツとした。「少しの距離なのに、うるさいな。ヘルメットを被ると髪が崩れるし、カッコ悪いな。時間もないのに、めんどろくさい……。」と言いつ返しとした。が、母の顔は真剣だった。仕方なく、いやいやヘルメットを頭に載せ、あごひもをカチツとしめた。

家を出てしばらくして、急な下り坂に差し掛かっ

た。その坂には段差があつて危ないから、いつもならブレーキを掛けながら通る。しかし、出掛けの母とのやりとりにイラついていたせいもあつたかもしれない。いつもよりスピードを出して走り下ろうとしたその瞬間、段差にタイヤが挟まり、体制を崩した。「危ない！」と思つたときにはもう遅く、スロ―モーションのように景色が回った。体が激しく地面へと打ち付けられ、次の瞬間、ガツンという鈍い衝撃とともに、僕の頭は硬いアスファルトの地面に強く打ち付けられた。

しばらくは何が起こつたかわからず、そのまま寝ていたが、恐る恐る立ち上がった。擦りむいた手足がズキズキと痛んだ。しかし、不思議なことに一番強く打つたはずの頭には激しい痛みがなかった。不思議に思つてヘルメットを頭から外してみた。僕は息を呑んだ。ヘルメットの表面が少し凹み、内側の硬い発泡スチロールにも割れている部分が見えた。

血の気が引くとともに恐怖が襲つてきた。もし、あの時の母の言葉を聞かずにそのまま家を出ていたら、このヘルメットの傷はすべて僕の頭に刻まれて

いた。最悪の場合、死んでいたかもしれない。そう思うと涙が込み上げてきた。体は痛かったが、まわりには誰もいなかったのも、仕方なく僕は痛む体を押して家へと帰った。

母は驚き、そして、手当をしながら怒り始めた。その顔を見ながら、ぼくは「なぜヘルメットを被らずに行こうとしたのだろう。」と深く反省した。数日後、母と「ちゃんとヘルメットをかぶる」という約束をして新しいヘルメットを買った。

あの日以来、僕はどんなに短い距離でも必ずヘルメットを被るようにした。もしあの日の母の一言がなければ……今でも時々そんな恐ろしい想像に背中がゾツとする瞬間もある。急いでいるときにも、あの時の母の「ちょっと待って、ヘルメットはちゃんと被りなさい。近いからと言って油断したらだめ。」という声が頭に響き、ヘルメットへと手を伸ばす。

自転車はとても便利でたのしい乗り物だ。だが、一歩間違えれば命を落とす危険と隣り合わせで、「格好悪いから。」などという軽い気持ちを取り返

しのつかない悲劇を生み出す乗り物でもある。だからこそ、家を出る前に必ずヘルメットを被り、あごひもを締めたことを確認する。そうすることで、僕は僕の命を守る。

僕の命を救った、母の一言とヘルメット。あの日を境にヘルメットは僕の大切な相棒になった。

家族の安全と交通ルール

西条北中学校 二年 赤井 晃良

私の家族はみんな自転車で毎日通学、通勤しています。令和八年四月一日から自転車の交通違反に交通反則通告制度、いわゆる青切符が導入されました。自転車を毎日使う私たちにとっては、とても大きなニュースでした。十六歳以上が対象なので、私以外の家族はもちろん、私も今から気を付けていくためにも、家族でこのことについて話し、交通ルールを守ることや、自分たちの命を守ることを考えて生活する大切さを話し合いました。

まず、青切符が導入される前の令和五年にヘルメット着用の努力義務化が始まりました。小学生だった私や、中学生の姉はヘルメットを持っていました。が、両親は持っていなかったもので、この機会にヘルメットを購入し、着用するようになりました。父や母に、ヘルメットについてどう考えているか話を聞くと、

「今までなぜ自分たちがヘルメットを着用していなかったかが分からない。子どもたちには、命を守るためにかぶるよう話していたのに、自分たちは平気でかぶっていなかった。初めは慣れなかったが、かぶり慣れると、ヘルメット無しでは不安に感じるようになった。義務化されたからではなく、自分のためにかぶるようになった。」と話していました。

私も、ヘルメットをかぶらずにいる中学生を見かけることがあります。自分にとっては当たり前なので、かぶらないほうが不自然に感じます。

調べてみると、自転車事故で亡くなった方の約八割が頭部に致命傷を負っているということです。また、未着用時の致死率は、着用時に比べて、約二倍から三倍高くなるようです。

事故は避けられません。気を付けることはできても、完全に防ぐことは難しいです。だからといって、自分の命を守るためにできる努力をしないのはもったいないし、みんなもつと命を守る努力をするべきだと思います。病気になる可能性が少しでも下がるなら、健康に良い食べ物を食べたり、運動したり、

努力するのと同じで、ヘルメットをかぶることで防げるものが少しでもあるなら考えると、ヘルメット着用は始めやすいことだと思います。また、母が「自分たちが小さいときは車のシートベルトの着用率は今よりもずいぶん低かったよ。今は運転席、助手席はもちろん、後部座席の人もシートベルトの着用率が上がっているね。そんなふうにヘルメットの着用も当たり前になればいいな。」と話していました。

このシートベルトのように、自分たちにとって自転車の交通ルールを守ることが当たり前になっていくというのが、家族との話合いで分かりました。ただ、いくらか家族みんなが知らなかった違反もありました。一時停止については、私や姉はどこが一時停止の場所かを知らないことが多く、通学中の一時停止箇所を改めて確認する機会ができました。

また、今回の青切符導入の話合いで、家族で一番話したのは、歩道走行と逆走についてです。自転車の歩道走行は禁止されていますが、いくらか例外があり、その中の一つである、自転車通行可の標識が

あれば歩道を走行できるそうです。今まで自転車通行可の標識について知らなかったので、意識して街を見てみると、家族の通勤、通学路にも標識があることを知りました。さらに、歩道をやむなく走るときは、歩行者優先で徐行と一時停止すること、常に車道に近い側の部分を走行しなければならないということも知りました。

逆走について知らなかったことは、車道や路側帯を走る場合は、車の進行と同じ左側車線を走らなければいけません。歩道を通行する際は逆走の違反は適用されないということです。例外的に歩道を走るときは、どの方向に進んでも罰則はないそうです。車道を左側通行で走らなければいけないと必ずルールを守ろうとするあまり、そのことで、命が守られなかったら、何のためのルールなのか分かりません。安全に走るための優先順位を見失ってはいけません。思いました。

何よりも自分の命と安全、歩行者の安全、左側通行の順でルールを守っていくことが大切ではないかと、家族で結論に至りました。基本は車道の左側だ

けど、少しでも危険を感じたらすぐに歩道へ逃げる。自分の命を守るために、ルールを守るという優先順位を忘れないこと。そして、自分の命を守るために、交通ルールや標識について知ることの大切さを感じました。

家族でこのように話し合って、情報共有して、これからも交通安全に対する意識を高めていきたいと思っています。